

雑草からみた縄文時代晩期から 弥生時代移行期における イネと雑穀の栽培形態

The Initial Form of Rice and Millet Cultivation during the Final Jomon-Yayoi
Transition Era from the View of Archaeobotanical Weed Assemblages

那須浩郎

NASU Hiroo

はじめに

①稲作と雑穀農耕の起源と伝播

②縄文時代のイネと雑穀

③イネと雑穀の栽培形態

まとめ

【論文要旨】

縄文時代晩期から弥生時代移行期におけるイネと雑穀（アワ・キビ）の栽培形態を、随伴する雑草の種類組成から検討した。最古の水田は、中国の長江中・下流域で、約6400年前頃から見つかっているが、湖南省城頭山遺跡では、この時期に既に黄河流域で発展した雑穀のアワ栽培も取り入れており、小規模な水田や氾濫原湿地を利用した稲作と微高地上での雑穀の畑作が営まれていた。この稲作と雑穀作のセットは、韓半島を経由して日本に到達したが、その年代にはまだ議論があり、プラント・オパール分析の証拠を重視した縄文時代の中期～後期頃とする意見と、信頼できる圧痕や種子の証拠を重視して縄文時代晩期終末（弥生時代早期）の突帯文土器期以降とする意見がある。縄文時代晩期終末（弥生時代早期）には、九州を中心に初期水田が見つかっているが、最近、京都大学構内の北白川追分町遺跡で、湿地を利用した初期稲作の様子が復元されている。この湿地では、明確な畦畔区画や水利施設は認められていないが、イネとアワが見つかっており、イネは湿地で、アワは微高地上で栽培されていたと考えられる。この湿地を構成する雑草や野草、木本植物の種類組成を、九州の初期水田遺構である佐賀県菜畑遺跡と比較した結果、典型的な水田雑草であるコナギやオモダカ科が見られず、山野草が多いという特徴が抽出できた。この結果から、初期の稲作は、湿地林を切り開いて明るく開けた環境を供出し、明確な区画を作らなくても自然地形を利用して営まれていた可能性を示した。

【キーワード】 稲作、雑穀作、水田、縄文、弥生、雑草